

益田市長
山本浩章

20世紀以降の情報技術の進歩は、個人の生活と社会の様相を大きく変えてきました。映像と音声を電波に乗せてお茶の間に届ける「テレビ放送」、大量の情報を高速かつ正確に処理し記憶する「コンピュータ」、地球の裏側の出来事をも即時に伝える「衛星放送」、世界中を情報通信網でつないだ「インターネット」、通話、撮影、ネット接続が指一本で可能な「スマートフォン」。いずれも世に出た当初は衝撃的でしたが、普及してしまふとすっかり日常に溶けこんでいます。今後生み出され、広まってくる技術もまた同様の道筋をたどることでしよう。

近未来の都市では、各家庭の電化製品や自動車、公共施設や事業所など多種多様なモノと場所が接続し、大幅な自動化や省エネルギー化が実現するとされています。この「スマートシティ」を支える重要な基盤となるのが「モノのインターネット」と訳

されるIoTです。

益田市では、直面する様々な行政課題の解決という観点からIoTの実証実験に積極的に関わっています。平成30年10月に開始した「スマートヘルスケア推進事業」はその一つで、市役所を含む複数の事業所の従業員の皆さんから血圧などの健康データを日々サーバーに送信していただくものです。個人の病気予防に役立てるだけでなく、蓄積されたデータの分析結果と病気の発生との関連性を研究し、医学の進展と医療費の削減につなげる狙いもあります。

この事業の際立った特徴はその背景にあります。すなわち、地元の医師会や病院など医療関係者の理解と協力を得て進めていること、島根大学医学部による医学研究と並行するものであること、民間企業による高性能な機器の無償貸与により可能となったことです。まさに、今年度の益田市の基本方針である「連携の進化（深化）」を具現化する取組です。

IoTに関しては今後さらに分野を広げ、積極的に取組む考えです。新しい技術を活用して地域課題の解決を進めるとともに、この益田の地からどこよりも早く次の時代の世界標準を発信するという壮大な夢も描きつつ進めていきたいと思っています。

益田市の文化財の紹介

第1回 小川家木地屋文書

【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

木地屋（木地師）とは、轆轤を使って木材を加工し、椀・盆・杓子などを製作した人々のことです。中世から明治初期まで、良材を求めて諸国の山々を渡り歩きながら活動していました。

木地屋は流浪の民であるが故に、しばしば迫害にあいました。彼らは、文徳天皇の第一皇子である惟喬親王が近江国小椋郷（滋賀県東近江市）に隠棲し、山々の材木を加工して生計をたてることを天皇家から認められたという伝承をよりどころに、親王を業祖・祖神と仰ぎ、みずからも親王の末裔と称することで、その権利を主張しました。

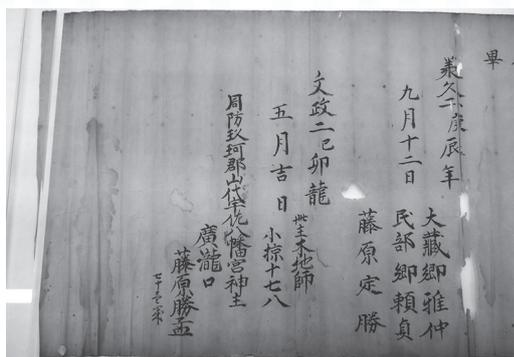
小椋郷に所在する蛭谷の筒井八幡宮（筒井神社）と君ヶ畑の金竜寺の二つの本所が諸国の木地屋を支配していました。木地屋は本所に金品を納める代わりに、活動を保証する文書を発給してもらったの保護を受けました。そのような文書が木地屋文書です。

西中国山地の山林資源に恵まれた匹見にも多くの木地屋がいました。筒井神社に残る諸国の木地屋から初穂料を徴収した記録である「氏子駈帳（狩帳とも）」からは、四五〇人余りの匹見に逗留した木

地屋の存在を確認できます。

小川家木地屋文書は、匹見の木地屋の家に伝わった木地屋文書で、二通が現存します。どちらも惟喬親王の伝承を記し、木地屋の権利が主張されている点は同じですが、うち一通は奥書があり、文政二（一八一九）年五月吉日のもので、持ち主が木地師の小椋十七八、書いた人物が周防国玖珂郡山代字佐八幡宮（山口県石国市錦町字佐）の神主広瀧口勝孟とあります。

宇佐は中国道の深谷パーキングエリアの近くであり、まさに山深い地域ですが、それだけに木地師の信仰を集めた神社であったことがうかがわれます。



小川家木地屋文書のうち一通の奥書部分